図解 計画的につくられた江戸の町

江戸時代は、武士、町人(商人、職人)、農民など、職業による身分制度があり、住む場所も分けられていた。江戸の町は、城を中心に、西側(地図左)に多くの武士を住まわせて守りを固め、東側に商人や職人を集めて、武士の生活に必要なものを調達できるようにするなど、計画的に整えられた。農民が住む農村は江戸郊外にあった。

江戸の7割が武士の住まい

江戸時代中期から幕末の江戸の人口は約120万人で、武士と町人の割合は半数ずつだったといわれている。けれども、江戸の町の約7割は武士が暮らす武家地で、残りの3割が町人地と寺社地だった。この地図からも、町人地に比べて武家地の敷地がとても広いことがわかる。

●町の面積の割合

●使い分けられた大名屋敷

大名は江戸にいくつかの家をもっていた。大名とその家族が住む上屋敷、跡取りに職をゆずったあとの大名などが住む中屋敷、別荘や避難所として利用した下屋敷など、目的によって使い分けていた。

●町名があったのは町人地だけ

「○○町」と町名がついていたのは町人地だけで、大名屋敷などが建ち並ぶ武家地と、寺社地には町名がついていなかった。しかし、大名屋敷や寺社などが移転したり、大名が問題を起こして身分や屋敷を取り上げられる「お家取りつぶし」になったりすると、広い屋敷があったところは町人地となって、町名がつくこともあった。

- 武家地
  大名・旗本屋敷などがあり、武士が住んでいた。
- 町人地
  商人や職人が住んでいた。
- 寺社地
  寺や神社が建てられた。

大江戸八百八町ってどこまで?

江戸の町は、明暦の大火(→p. 32)のあとに整備され、大江戸八百八町とよばれるまでに広がった。1818(文政元)年に幕府は江戸の地図に赤い線(朱引)を引き、江戸の範囲を正式に決めた。その内側の黒い線(墨引)は、町奉行が支配する範囲を示している。

武士が暮らす町

●大名が住んでいた広い大名屋敷

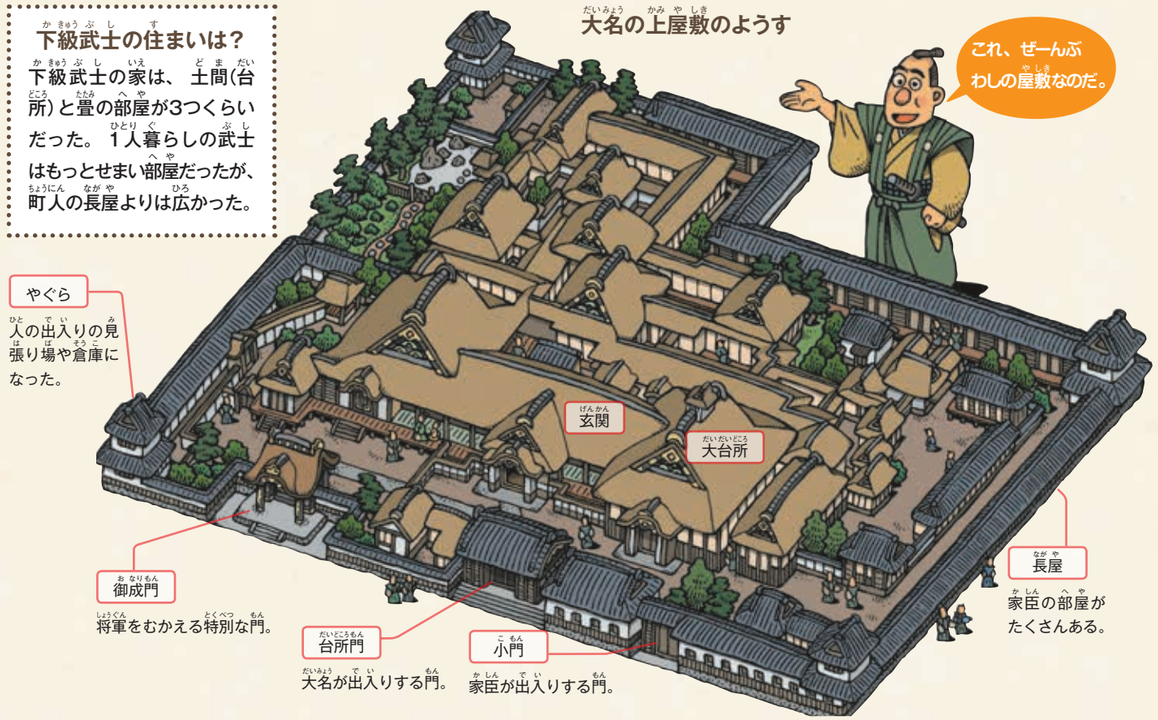
大名屋敷は幕府から与えられた敷地にあり、1～2万石の大名で2500坪、10～15万石以上で7000坪というように、広さが異なった。大きな屋敷には、藩主(殿様)と家族のほか、家臣や使用人など500～5000人もの人が住んでいて、たくさんの部屋があった。

＊1坪は3.3㎡

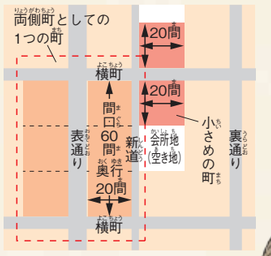
下級武士の住まいは?

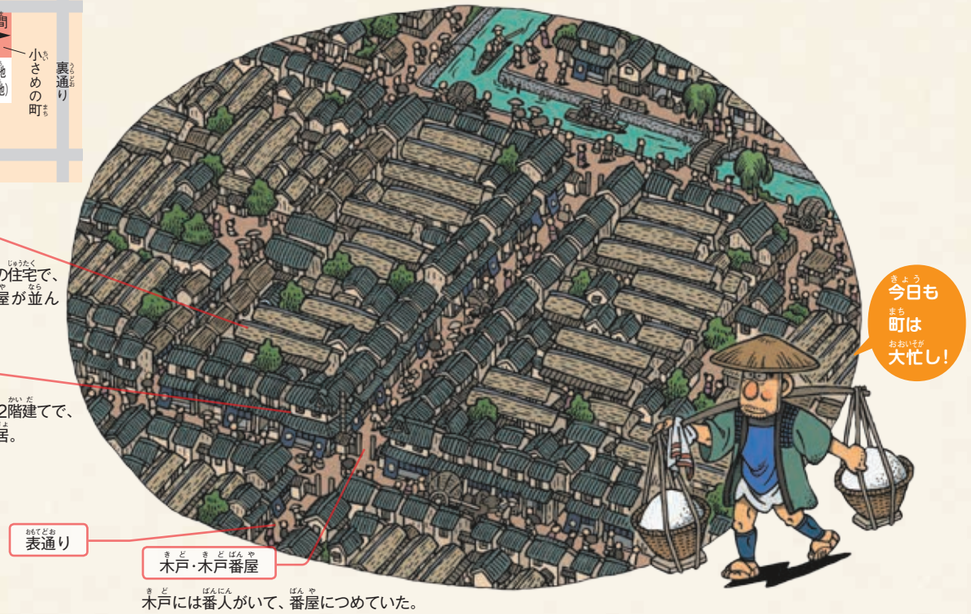
下級武士の家は、土間(台所)と畳の部屋が3つくらいだった。1人暮らしの武士はもっとせまい部屋だったが、町人の長屋よりは広かった。

大名の上屋敷のようす



町人が暮らす町



●町の広さが決められていた

間口60間(約120m)×奥行き20間(約40m)の広さが1つの町の基準で、40間×20間、20間×20間など、小さめの町もあった。通りをはさんで左右に店や家がぎっしり建っていた。町の境界には防犯の役割もする木戸という門があった(→p.53)。